○「原発事故は収束した」と野田総理。ぜひ南相馬市に来て、家族と生活してみてください！

九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.187
2012（平成24）年　5月12日（土）発行

山吹

3.11東日本大震災・原発事故・・・私はこう思う ⑭

父は原発に殺された　原発事故さえ、避難生活さえなければ・・・

双葉郡双葉町寺沢（避難先の福島市にて）会員・ 穂積憲一さん

今年三月、県立相馬東高を最後に定年退職された穂積憲一先生。原発事故で双葉町の自宅は警戒区域内となり、避難先の福島市から相馬市に通勤されていました。
（写真は昨年四月一一日付『福島民報』「今を生きる⑤」より）

柔道部の指導中に大震災に遭う

この世に生を受けて５９年、今までに体験したことのない地鳴りと揺れの長さに、この私ですら恐怖を感じた。昨年３月11日、私は相馬東高校の武道場で柔道部活動の指導にあたっていた。揺れが収まりすぐに生徒を校舎の二階に避難させた。そこには校内で部活動をしていた数十人の生徒がすでに避難していた。

そして、何度も家族と連絡を取ろうとしたが、携帯電話も固定電話も共に不通。家族の安否を気にしながらなんとか保護者と連絡を取り、それぞれ生徒達を家族の元へ送り届け、全員が終ったのが午後9時30分を過ぎていた。

信号機も作動しない、陥没して寸断された道路を迂回しながら、相馬市から双葉町の自宅に戻った時はすでに12日になっていた。しかし、家の中は暗闇で人の気配は無い。寝たきりで一人では動けない父も居ない。家族はどこかに避難したのかと思い、心当たりのところを捜し回ったが見つからず、その夜は一人暗闇の車中で過ごした。

娘の狭いアパートに家族9人が避難

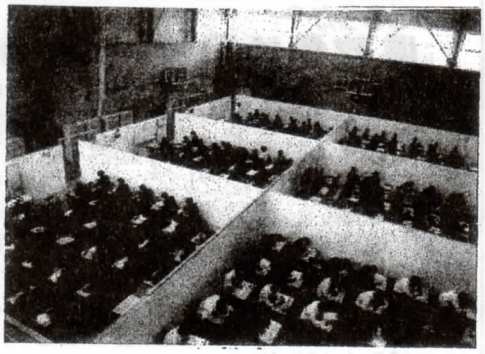
翌12日の土曜日は勤務の予定だったが、不穏な状況なので夜明けと共に家族を捜した。すでに町には避難警報が流れ、所属は不明だが防毒マスクをした人達がマイクで避難を叫んでいた。パトカーも数十台で走り回り、喧騒な状況はまるで戦争映画を観ているようだった。午前８時頃、やっと町の介護センターで父を捜し当てたが、一緒に連れて避難することはできなかった。可哀相だったがその場は職員にお願いし、母、妻、次女家族を捜し続けた。勤務高校に向かう途中の午後２時過ぎにやっと連絡が取れた。家族は渋滞に巻き込まれ動けないとのこと・・・よかった～生きていた。やっと安堵した。家族は町から指示された川俣への避難を途中であきらめ、妻の判断で郡山市の娘のアパートへ向かっているという。その日の出勤を諦め、私も郡山市に向かった。午後７時頃、ようやく家族と合流することができた。お互いの無事を喜んだが、総勢９人で暮らすにはアパートは狭すぎ、さらに放射能の恐怖は言葉に言い尽くせないものがあった。

避難から16日後、父は無念の死を

14日、何とかガソリンを入手し、父を郡山から川俣の避難先に迎えに行った。アパートでの数日間、父は嬉しそうに過ごしていたが、それまでの想像しがたいストレスが病弱な老体には相当苛酷だったようで急性肺炎となり、１９日早朝に入院し、28日に急性脳梗塞で亡くなってしまう。避難から僅か16日後のことである。父もこんなことで、人生が終わるとは思いもしなかっただろう。無念だったろう。原発事故さえ、避難生活さえ無ければ・・・もっと元気でいられたかと思うと本当に悔しい。父は原発に殺されたも同然である。葬式も満足にできず、申し訳ないと思う。

その後も家族の妙高市や東京への避難、子供や孫の被曝の不安、父の祭日、辛かった郡山からの通勤など色々あったが、４月下旬からは福島の借り上げのアパートで暮らしている。

劣悪な教育環境でのサテライト授業



体育館を区切った教室でのサテライト授業。（写真は今年三月一一日発行『福島県立退職教職員九条の会ニュース』第6号より）

原発事故から２ヶ月後の5月9日、原発から３０㎞圏内で、避難を余儀なくされた相双地区の９高校が、サテライト方式により学校を再開した。私の勤務校の相馬東高校はサテライト協力校として、２校のサテライトを受け入れたが、その実態は、まさに不自由、不公平の一言に尽きる。劣悪な教育環境と不便な通学、学用品や食料品の不足など、多くの問題を抱えながらのスタートだった。空き教室を間借りしたり、体育館を仕切っただけの教室に詰め込まれたりと、通常の授業もできない状況で、教科書も制服すらない生徒達は、ただ必死に授業を受けるのが精一杯であった。

（裏ページに続く）

●＜福島民報社調査＞では、体調を崩したり、自殺などの「震災関連死」は4月27日現在、福島県内で783人、南相馬市だけで295人です。穂積さんのお父様のような原発事故の恐ろしい人的被害も拡大しています。
●また震災後17日間も透析を受けられずに死亡した元原町高校のT先生のお話を聞き、悲しみと怒りに震えています。

（表ページより続き）

部活動も学校行事も修学旅行も無く

また、県内に幾つものサテライトを設置した学校は、部活動や学校行事などはほとんど実施できなかった.り、高校生活で最も楽しみにしていた修学旅行が中止になった2年生もいる。

体育や運動部の屋外競技などは、放射能の不安に悩まされ、満足な練習もできないままインターハイ予選に出場し、悔しい思いで引退した3年生も多い。サテライト校先では部活の合同を断られた学校もあったという。

その一方では、校舎も無事で震災前と何ら変わらぬ学校生活を送っていた高校生もいて、原発事故さえなければ充実した学校生活を送っていただろうと、サテライトの生徒を見ていると不憫でならない。

「戻らなければ 辞めろ！」

生徒だけでなく、教員の勤務状況も、極めて不公平であった。原発事故後は県外へ避難した教員も多い。私も郡山市から一時、新潟県の親戚宅に避難したが、家族は東京などへバラバラであった。被曝の不安から子供をはじめ家族を守るために仕方のないことである。しかし、教員（公務員）ということで、所属長より勤務校に戻るよう指示が出て、挙げ句の果ては「戻らなければ 辞めろ！」という威圧的な発言もあったという。まさに戦時下並の扱いであった。

片道130kmの超遠距離通勤の先生も

ある教員は、幼児がいるので会津に避難したが、勤務地である相馬市まで、片道約130ｋｍ、3時間半の超遠距離通勤を強いられ、体調を壊したという。また幼い子供を持つ女性教員は、相双地区から県北地区と県南地区の掛け持ちでノイローゼになりそうと嘆いていた。またある女性教員は、県北地区と県南地区の兼務となり、相馬市からも通勤し過労で倒れ、今でも病休中である。県外からの通勤者も多くなり、慣れない道路の通勤、積雪や道路凍結、渋滞、かさむ燃料費、職場環境への対応など、実際に経験しなければ分からないような深刻な苦悩が潜んでいた。原発事故によりサテライト方式をとったことで、教員の多くはストレスに悩まされ続けながらも、生徒のために命を削る思いで勤務することとなった。こんな勤務はいつまで続くのだろうか？

県教委は何をしたのか？

こうしたサテライト校の教職員に、県教委は何をしたのか？学校経営はサテライト校へ丸投げし、形だけのサテライト訪問。問題が起きると理不尽で高圧的な言動や態度で迫ったという。転勤しても貸し住宅やアパートが無い。自分の子供の転校もあるのに、居住地が未だに決まらない、など理不尽な例は挙げれば切りがない。「教育の復興」と言いながら、未だに見えないサテライト校の復興ビジョン。そしてこの時期に教育長が交代するという責任回避ともとれる茶番劇に開いた口がふさがらない。

でも生徒も教員も満開の花を咲かせようと

桜の蕾がやっと膨らみ始めた4月上旬、サテライト校にも新入生が入学してくる。新入生が7名という寂しい入学式もある。しかし学校存続の危機の中で、教員も生徒も満開の花を咲かせようと歩み続けている。

「ほどもなく　移り行くべき　家と見ず　障子の破れを　繕いにけり」窪田空穂（家を移り住むように、生から死へとまもなく人生が終わるが、間違いは訂正していくのだ…という意味とか）

＜今年3月、保健体育科高校教諭を定年でご退職＞

南相馬市などの子どもたちの悲惨な状況の＜例＞

全般には●全小中高校で生徒数は激減している●津波で家が流されたり、警戒区域（南部の小高区）の立入禁止や、放射能を避けて、遠く県内県外の親戚宅などに預けられたり、両親の勤務の関係で家族が別れて生活していることが多い●小学生などは母親と同居していることが多い●内部被曝のおそれもある●深刻なストレスを抱え、不登校の子どもも多い。

保育所幼稚園では●市外への避難者が多く、200人だった幼稚園児が２０人足らずになった園もある●二十数人の園児の家の除染作業を園長さん自らがボランティアの人々とともに、土・日曜日ごと行っている●園舎や園庭を除染してある程度放射線量は下がったが、また戻りつつあったり●野外では遊ばせなかったり、時間を決めて活動させたり●保母さんも市外に避難して不足している●私立で、閉園のところも出た

小学校では●警戒区域内の小高区の小学生は、市内北部の鹿島区の小学校の仮設教室で授業を行っている。当然親が近くに住んでいなければそこへも通学できない●避難準備区域の時、朝通学バスで数ｋｍ離れただけの鹿島区の仮設校舎へまとまって移動していた

中学校・高校では●市外や県内他校を間借りしてのサテライト授業は劣悪な環境で、体育館などをベニヤ板で仕切り隣の声は筒抜け、教室は狭く暑く寒く、授業に集中できる状況ではないし、肩身の狭い思いをしている●始業式、入学式、生徒総会や学園祭も開けないし、遠足も修学旅行もなかったが、各方面からの支援で無料招待の修学旅行などを実施できた学校もある●体育の授業は１ｋｍも離れたグランドへ●運動部や文化部も部活動を行う場所もなく、部員も少なくなり消滅の部も多い●甲子園に過去３回出場の高校の野球部員は数名になり活動も危うい●農業科工業科の実習授業はできない●常磐線が寸断され通学も困難●教育環境も昨年より改善されてきているが、自校のようにはいかない●志望していた高校をあきらめて、単純に通学可能な高校へ進学した●県内外の他の小中高校に転校したが、校風にあわなかったり、放射能汚染の風評でいじめにあい、戻ってきた生徒も多い●大学や専門学校への進学、音楽や美術科などの大学進学を経済面や家族の関係で断念した生徒も多い

教職員の苛酷な勤務の＜例＞　**教師も「被災者」ですが、これらはあまり報道されていません！**

●原発立地地域の双葉郡や南相馬市小高区は警戒区域となり、その全小中高校は３０㎞圏外の学校を間借りし、サテライト校や仮設校舎の劣悪な環境で授業を実施●生徒が分散したため教員は数校の苛酷な「兼務」を強いられている●６人家族だったが共働きの夫と妻の勤務校、高齢の両親、子ども達もバラバラで５世帯になったり●幼児を避難させて住む会津若松市から勤務校のある相馬市まで、片道130ｋｍ・3時間半の超遠距離通勤の先生も●女性教員で相双地区から福島地区と郡山地区の兼務通勤でノイローゼになった●女性教員で郡山市に住み、郡山と二本松と会津若松の三高校の兼務で、乳児は茨城へ夫と姑と避難していたが、この３月に耐えられなくて退職した●片道90ｋｍ遠距離通勤の教師も多く、過労で高速道路で時々意識がなくなる●慣れない道路、積雪や凍結、渋滞、かさむ燃料費、職場環境に馴染めずストレス等々

○事務局では、南相馬市の小中学校と相双地区の高校の**「震災前（22年4月）」と「震災後1年（24年4月）」の生徒数**を調べ比較してみました。南相馬市の小中学校の生徒数は半減し、相双地区の高校も、新地高校で増加していますが、ほとんどの高校で生徒数は減少か半減しています。

○また＜上記の右＞の「子どもたちと教職員の例」は、事務局の調査と、ＤＶＤドキュメンタリー**『わたしたちは忘れない・福島避難区域の教師たち』**（製作・湯本雅典）から採りました。